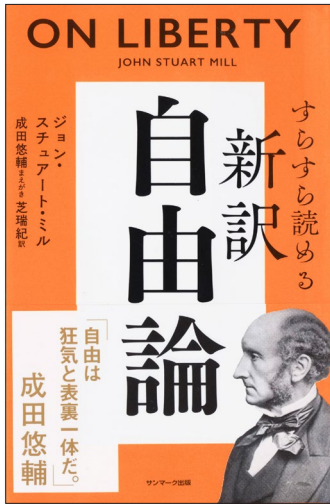




## 『すらすら読める新訳 自由論』

ジョン・スチュアート・ミル 著

芝 瑞紀 訳

サンマーク出版

2024/10 288p 1,760 円（税込）

まえがき（成田悠輔）

1. はじめに
2. 思想と言論の自由
3. 幸福の要素としての個性
4. 社会の権威が個人に対してできること
5. 原理を適用する

### 【イントロダクション】

起業家イーロン・マスク氏が「言論の自由の守護者になる」と表明して旧ツイッターを買収した衝撃は記憶に新しい。われわれは今、「自由とは何か」という問いについて改めて考えざるを得ないのではないか。その思考の手助けになる古典的名著がある。19 世紀半ばに英国の哲学者が著した『自由論』だ。本書は、1859 年にジョン・スチュアート・ミルが発表し、日本では『自由論』として知られる『On Liberty』の新訳。平易な現代語で翻訳されており、現代にも通じる「社会において個人の自由はどこまで許されるか」の本質的な議論が伝わりやすい書になっている。「人は他人に危害を加えない限り自由だ」という主張が柱であり、それに関する歴史的な事例や、想定される反論とそれへの回答を交えながら、論を展開する。著者のミルは 1806 年生まれ、1873 年没。政治哲学者、経済思想家でもあり人文・社会科学の数多くの領域において大きな業績を築いた。代表的著作に、『自由論』のほか『功利主義論』『論理学体系』などがある。

## ●「社会の利害と（直接的には）無関係」な領域が個人の自由な領域

社会と個人を完全に切り離されたものとして考えてみよう。すると、社会の利害とは関係ない（あるいは「間接的な」関係しかない）種類の行動があるとわかる。そうした行動は、基本的に本人にしか影響を及ぼさないし、他者に影響を与えてとしても、その他者がみずから自発的にその行動に関与する場合に限られる。「本人にしか影響が及ばない」というのは、要するに「他者に直接的な影響を及ぼさない」ことだと覚えておこう。

「社会の利害と（直接的には）無関係」な領域こそ、個人の自由な領域だと言える。この領域はいくつかの分野で構成されている。

第一に、「意識」という内面の分野。思想と感情の自由、意見と感想の自由が、実際のか思想的かにかかわらず認められなければならない。言論や出版における「表現の自由」は、たとえ個人の行動であっても他者に影響を与えかねないため、ここには含まれないと思うかもしれない。しかし、実際には両者を切り離すことはできない。

第二に、「好き嫌いの自由」と「目的追求の自由」。人はみな、自分の性格に適した人生を設計し、自分の願望に従って行動する自由をもつ。どんな結果も受け入れることと、他者に害を及ぼさないことを徹底できるなら、たとえ愚か者だと思われようが、変わり

者と言われようが、悪者として嫌われようが、何をしようと本人の自由だ。

第三に、「団結の自由」。他者に害を及ぼさないなら、人は目的に関係なく自由に団結できる。ただし、団体に加わる人が成人であることと、その人が強制されたりだまされたりしていないことが条件になる。

以上の自由がじゅうぶんに尊重されていない社会は、どのような政治体制をとっているとしても「自由な社会」ではない。他者の幸福を奪ったり、幸福になるための他者の努力を邪魔したりしないかぎり、自分なりの方法で自分の幸福を追求できること。そのような自由だけが、「自由」と呼ばれるに値するのだ。

### ●「異端の意見」を沈黙させることは「知的な活動」をさまたげる

ほぼすべての人の意見が一致していて、異なる意見を主張する人がひとりだけいるとしよう。そのような場合でも、そのひとりを沈黙させてはならない。

「否定された意見をもつ人」よりも「その意見に反対する人」のほうが深刻な損害をこうむると覚えておこう。なぜなら、その否定された意見が本当は正しかったときに、間違いを認めて考えを改める機会がなくなるからだ。反対に、否定された意見が実際に間違っていたとしても、否定した側はやはり損害を受ける。正しい意見と間違った意見をぶつけ合い、真理を磨きあげ、いままで以上に理解を深めるチャンスを失ってしまうのだ。

身近な人全員が同じ意見を支持していたり、尊敬している人が自分と同じ意見をもっていたりすると、自分が間違っている可能性について考えられなくなる。自分ひとりの判断に自信がもてない代わりに、世間の判断に過剰な信頼を寄せてしまうのだ。だがその人にとっての「世間」とは、日常的に接している人たち、たとえば同じ党派、宗派、教会、社会階級に属する人たちのことだ。

現代社会は不寛容さに満ちているが、誰かを処刑したり、特定の意見を根絶させたりすることはない。それでも、社会的に異端とされる意見をもつ人は、自分の意見を表には出さない、あるいは積極的に広めないよう注意を払う。

こうした状況は、一部の人々にとっては非常にありがたいものだろう。罰金や投獄といった罰を与えなくとも、多数派の意見が（表面的には）安定して維持されるからだ。その裏で、異端とされる人々にも、理性に従って考える自由をある程度与えている。つまり、思想の分野における「平和」を保ちながら、新しい考えが生まれる「可能性」も残せるということだ。たしかに、これはとても好ましい状況に思える。

だが、こんな状況で、かつて存在したような率直で大胆な思想家や、一貫した論理をもつ思想家が現れるはずがない。

また、異端とされる人が沈黙したら、異端の意見についての「公平かつ徹底した議論」が行われなくなる。すると、「議論を通じて消え去るはずの間違った考え」が社会に残ることになる。その考えが広く普及することはないとしても、完全になくなる機会も失われてしまう。

「正統」とされる考えから外れた議論をすべて禁じたとしよう。その場合、深刻な被害をこうむるのは、異端者ではなく多数派のほうだ。なぜなら、多数派の人々は「異端」呼ばわりされることを恐れるあまり、自由にものを考えられなくなるからだ。

社会によっては、原理に関する議論をしてはならないという暗黙のルールや、人間にとっての最大の問題はすでに解決しているという暗黙の前提がある。そういう場合、歴史のなかで何度か見られたようなすばらしい状況、つまり「あらゆる国民が積極的に知的な活動に取り組む状況」はまず生まれない。

あらゆる国民が積極的に知的な活動に取り組んだケースとしては、第一に、宗教改革

直後のヨーロッパ。第二に、18世紀後半に起きた思想運動（このときはヨーロッパ大陸の比較的教養のある人々に限られていたが）。そして第三に、18世紀末から19世紀初頭にかけてのドイツ。ゲーテやフィヒテが活躍した短い期間だ。それぞれ発展した思想は異なるものの、「権威による束縛がなかった」という点は共通している。

この3つの時期に生じた「強烈な衝撃」が、現在のヨーロッパを形づくったといえる。ヨーロッパでは、人々の知性や社会の制度に関してさまざまな改善が行われてきたが、どれも先に挙げた3つの出来事のいずれかがきっかけになっている。

こう主張する人もいるかもしれない。「主流の意見が正しい場合は、言論の自由がなくても問題ないのではないか。たしかに、大衆がその意見の根拠を知らないのは、知性の面から見ればけっしていいことではない。だが、大衆を正しい方向に導くという意味では、主流の意見の価値は変わらないだろう」

残念ながら、その主張は間違っている。自由な議論が行われなかったら、人々は意見の根拠だけでなく、その「意味」すらも重視しなくなる。

たとえば、道徳的、宗教的な教えのほとんどは本来の意味が失われている。いずれの教えも、創始者とその直弟子にとっては大きな意味のあるものだった。だがどんな教えも、ある瞬間を境に、社会における主流の座に就くか、拡大するのをあきらめて現状維持に努めることを迫られる。すると、その教えに関する議論は少しずつ減っていき、やがて完全に行われなくなる。

教わったことをそのまま受け入れておけば、その内容を深く理解したり、自分の体験を通じて確かめたりする必要はないと誰もが考えるようになる。こうした信仰は、人間にとっての“殻”のようなものだ。

## ●誰もが「個性」を発揮していく必要がある

さまざまな意見が存在するのはいいことだ。行動の多様性も同じくいいものだと言える。他者に危害を及ぼさない範囲で、さまざまな性格の人たちが思い思いに行動できること。さまざまなライフスタイルが存在し、誰もがそのなかから興味のあるものを選び、実際に試し、その価値を確かめられること。いずれも人類にとって有益なことだ。つまり、誰もが「個性」を発揮していく必要があるということだ。

現在、個人は大衆のなかに埋もれている。大衆はいまや、権威とされる人々の意見に従わなくなった。高名な聖職者の意見であれ、政府高官の意見であれ、指導者を自称する人の意見であれ、書物に残された意見であれ、あまり参考にしないのだ。大衆の意見をつくり出すのは、大衆と同じ立場にいる人々である。

現代は過去のどの時代よりも同調圧力が強まっている。慣習が思想や行動を支配するようになると、人間の成長はさまたげられる。進歩のためには自由が欠かせない。自由があるからこそ、個人は自分なりの進歩のきっかけを手にすることができる。

**コメント：**「同調圧力」は日本特有のものと思いがちだが、19世紀英国で刊行された書籍にこの言葉が登場することに驚かされる。「論破」や「炎上」といった「異端の意見を沈黙させる」ことで自由を阻害する風潮が蔓延している現代のSNSは、ミルの論に従えば、社会の進歩をさまたげるものと言える。時代も地域も超越する同調圧力は、人間の本性なのかもしれないが、あえてそれに打ち勝つエネルギーを持たなければ、社会の発展は難しいのではないだろうか。